資料紹介

伝音アーカイブズ「胡弓に関する史料年表―16 ～ 17 世紀―」

加納　マリ、竹内　有一

1　公開と現状

日本伝統音楽研究センターでは、2008 年度から 2009 年度にかけて、胡弓の歴史的資料を精査し直すための共同研究が実施された（研究代表者：竹内有一）。一連の共同研究の概要と成果は、すでに『日本伝統音楽研究センター所報』10 号（2009 年 6 月刊）･11 号（2010 年 6 月刊）および web サイト上の「研究情報」において報告されている通りであるが、この共同研究における最も大きな成果は、当研究センターの web サイトで公開されている「伝音アーカイブズ」中の「胡弓に関する史料年表―16 ～ 17 世紀―」であろう。その作成者は、以下の通りであるが、以下に記したほかにも、多くの研究者の力添えを受けている。

［編集］泉万里、加納マリ（企画）、蒲生郷昭、神戸愉樹美（企画）、竹内有一、野川美穂子

［協力］井口はる菜、上野暁子、笠原洋子、久保田敏子、後藤静夫、五野井隆史、高梨光正、田中悠美子、寺内直子、徳丸吉彦、中溝一恵、皆川達夫

［web コンテンツ構成］東正子

共同研究が実施されたのは二年間であったが、共同研究の終了後に着手したこの年表の編集とデータベース化には、約一年半を要した。データベース化が難航した要因は、年代や史料種別ごとの絞り込み機能の設定、データベースから関連資料へのリンク機能の実装等に試行錯誤したためであった。共同研究の解散後も、引き続き元共同研究員が年表原稿の編集に協力してくださったが、新しい史料に関する情報もしばしば寄せてくださるので、それらをデータベースに追加していく作業も簡単ではなく、一手間二手間を要することであった。ようやく 2011 年秋に試験公開を行い、12 月末に正式公開を始めた。

この年表は、web 公開の利点を活用して、公開直後から幾度となく情報の補訂を施してきたが、公開から一年間を経て、更新作業もやや落ち着きを見せてきた。引き続き、web 上で更新を続けていく方針に変わりはないが、この年表をさらに多くの研究者にじっくりと手にとってもらうことの必要性も感じるようになった。

そこで、今回、この年表の概要を本誌上で紹介するとともに、年表本文の全項目 269 件（2013 年 1 月 7 日現在の件数）を巻末に収載することにした。伝音アーカイブズの web 上では、データ検索用の「年表をみる」というページにおいて、下記の A・B およびフリーワード入力による絞り込み機能が実装されているので、あわせて試していただきたい。

現時点でのデータ件数は、下記の通りである。

A　年代ごとの絞り込み

（1）天文 - 永禄　　1541-1569　38 件

（2）元亀 - 天正　　1570-1591　33 件

（3）文禄 - 慶長　　1592-1614　39 件

（4）元和 - 正保　　1615-1647　49 件

(5) 慶安 - 寛文　1648-1672　38 件
(6) 延宝 - 貞享　1673-1687　32 件
(7) 元禄　1688-1703　40 件
合計　269 件

B　史料の種別ごとの絞り込み
(1) 擦弦楽器が描画された史料（略号「絵」）　53 件
(2) ヴィオラ・デ・アルコほか、ヴィオラ・ダ・ガンバにあたる擦弦楽器名称が記された史料（略号「V」）　25 件
(3) 擦弦楽器ラベカの名称が記された史料（略号「R」）　11 件
(4) 擦弦楽器（胡弓）の名称が記された日本側史料（略号「語」）　37 件

2　アーカイブの内容

本稿の巻末において収録し紹介するアーカイブの内容は、以下の通りである。

A　序
B　データ検索ページ「年表をみる」
C　年表データベース本文
D1　付表：キリシタン文書頁数一覧
D2　キリシタン文書出典一覧
E1　研究情報
E2　主要参考文献一覧

なお、web 版と本稿に収録したデータの相違点は、以下の通りである。

＊ web 版に掲載されている、更新作業用の図版へのリンク内容、その他一部のリンク内容は、本稿においては割愛した。

＊「C　年表データベース本文」は、本稿においては、紙面での見やすさを考慮して、web サイトからの取り込みでなく、データベース本体から新たに書き出して再構成したものを掲載し、便宜的な通し番号（web 版には存在しない仮番号）をつけた。ただし、web サイト年表における所載項目「出典表」「作業用」「作成日」「更新日」は、本稿では割愛した。

3　評価と課題

(1) 年代の範囲について

この年表は、胡弓の起源や初期の状況を明らかにするための情報を年表形式でまとめたものである。1541（天文 10）年の「ポルトガル船、豊後に漂着」からはじめた理由は、擦弦楽器を将来したキリシタンたちの日本での記録（キリシタン文書）に注目したためであった。また、18 世紀初頭の元禄年間までで区切りをつけたのは、研究手法上の暫定的な措置ではあるが、次のような理由がある。

(A) 18 世紀以降になると、胡弓が描かれる図像資料は、それ以前のような屏風絵や風俗画など巨大な肉筆画より

も、錦絵や版本挿絵など小さいサイズの刊本において描かれる事例が主流となる。こうした図像資料の形態の変化に伴い、胡弓に関する情報が格段に増えていくので、まずは情報の少ない元禄期以前の資料を集中的に収集した。

(B) 18 世紀以降になると、胡弓の楽器としての形態が現行のものに近づいたとみられるが、元禄期以前は胡弓の形態や奏法が多様であった。つまり、胡弓という楽器に対する世間一般の認識も、元禄期頃を境に変わっていると考えられるので、まずは元禄期以前に着目した。

(2) 年表の記事から読み取れること―「胡弓」とは何であったか―

この年表の記述に基づいて、初期胡弓の研究にとって重要なことがらを拾い出してみよう。

16 世紀なかばに三味線が伝来、同じころキリシタンたちが西洋の楽器や音楽を布教のために使っていたこと。九州や関西では大名や貴族だけでなく、多くの庶民も西洋音楽に触れる機会があったこと。キリシタン文書のなかには胡弓についての言及はなかったこと。17 世紀初頭に胡弓をあらわす「小弓」ということばが登場し、後に「こきう」「鼓弓」「胡弓」等、さまざまに表記されたこと。17 世紀の図像資料（屏風絵、風俗画、挿絵など）においてさまざまな形の胡弓が認められること。また、多種の楽器との合奏図に胡弓が描かれていること。さらにこれまでに紹介されていない絵画資料が新たに見つかったこと。このような様々なことがらを読み取っていくことができる。中でも、私たちがもっとも重視したのは、「胡弓誕生」を裏付けるための記述を読み取ることであった。

この年表によると、楽器としての胡弓をあらわすことばの初出は、1609（慶長 14）年の『時慶記』である（表記は「小弓」、読みは不明）。そもそも 17 世紀より前の日本には擦弦楽器が存在した痕跡がない。そのため、この史料だけに着目すると、胡弓という楽器があたかも突然に降って湧いたかのように感じられるのである。私たちはこの不思議を解く鍵を、弓を使う楽器を日本に最初に持ち込んだことが明らかであるキリシタンたちの活動に求めることにした。つまり、彼らの動向が当時の日本人の「感性」に影響を与え、今日の胡弓のルーツに繋がる新しい楽器およびそれを用いた音楽の誕生をもたらしたのではないか。このような仮説を裏付けるための情報を収集し、年表として整理しようと考えたのであった。

キリシタンたちの活動は布教を目的としたものであったが、年表の随所に記されるように、結果として、西洋の楽器や音楽を多くの日本人に提供した。西洋楽器と日本人との関わりを記述した最後のキリシタン文書は、1607（慶長 12）年のもので、ラベカが秀頼の御前で演奏されたという記録である。この 2 年後に、前述の『時慶記』―盲人が「小弓」を演奏―が現れるのである。1607 年のキリシタンの日記に記された擦弦楽器と、1609 年の公家の日記に記された擦弦楽器が、相互に関連するものなのか、どのような類似性があるのかについては、双方の史料とも楽器の具体的形態を記していないため不明である。しかし、この頃までに弓を使う弦楽器が日本に「誕生」していたことは疑いないのである。

いずれにしても、1541 年から 1609 年までの間のキリシタン文書のなかから、楽器や音楽（西洋・日本を含む）についての記述を抜き出し考察を加えたことは、初期胡弓の研究史にとって画期的な成果であったといえよう。以上に述べた考察の詳細およびこの年表から読み取れることの要点は、神戸愉樹美「胡弓と rabeca―ソフトとしてのキリシタン起源説―」（『日本伝統音楽研究』第 7 号、2010 年）、加納マリ「初期の胡弓について―17 世紀の文字資料と図像資料から―」（同第 8 号、2011 年）に詳述したので参照いただきたい。

4　調査の周辺と今後

年表の作成に際しては、当時の中国・朝鮮・南アジアとの交易関係にも着目し、遣明船や朱印船などの公の貿

易品に関する史料、朝鮮通信使などの記録も調査したが、胡弓の起源に関わるような情報は見つかっていない。また、当時の民衆の風俗や文化と関わり深い、南蛮屏風絵や洛中洛外図屏風の研究者による協力を得て、それらの絵画史料も広く調査したが、胡弓の描画には出会えなかった。

日本人の言葉の用例をうかがい知ることのできる節用集（室町時代から明治時代までの国語辞書の類）については、幕末までの数十点の節用集にあたって、それらに記された楽器の名前を調べた。記された楽器の種類は延べ50種を越えるが、胡弓という楽器が節用集に登場するのは1717年、18世紀になってからであった。

以上のように、胡弓とは直接的な関係が得られなかったために年表には具体的に記載しなかった調査事項にも、胡弓について知るための手がかりはたくさんある。研究ミーティング等で得られた多数の考証考察の結果やその経緯も、年表という形式にはそぐわないため割愛せざるを得なかった点が多々ある。別途、研究ノート等のかたちでさまざまな課題を明らかにしておく必要があるだろう。

「年表」の宿命として、必要最低限の情報に絞り込んで、少ない字数で要領よく、誤解を受けないように正確に記さなくてはならないので、原稿作成には苦心した。特に、キリシタン文書に関する部分は日本語訳がなかったり、日本語訳が不明瞭のため、ポルトガル語の原文にあたったり、英語訳やドイツ語訳のものを参考にしたり、また、宗教用語の解釈など壁が高かったことも、ここに申し添えておきたい。

共同研究の終了した現在も、引き続き、新情報が私たちのもとに寄せられている。今後も情報が増えていくことであろう。誠にありがたいことである。今後、年表に訂正や追加項目が加えられ、胡弓の誕生や初期の状態が明白になることを求めて、さらに探究を重ねていきたい。

胡弓に関する史料年表—16～17世紀—

一、主旨

この年表は、16世紀以降に海外から日本に流入したとみられる擦弦楽器に関する史料、胡弓に関する元禄年間までの史料を俯瞰するものである。それらに関する考察や調査の経過等も記すことにより、胡弓が広く受容されるようになる元禄期以前の状況について、史料に基づいた客観的な研究を進めるための情報整理を目指している。（研究代表者：竹内有一）

二、作成者

この年表は、下記の共同研究の成果の一部として、共同研究員が中心となって作成したものである。

- 2008年度共同研究「胡弓の源流と受容—東西交渉の視点を中心に—」（研究代表者：竹内有一）
- 2009年度共同研究「胡弓の受容と現在」（研究代表者：竹内有一）

［編集］泉万里、加納マリ（企画）、蒲生郷昭、神戸愉樹美（企画）、竹内有一、野川美穂子
［協力］井口はる菜、上野暁子、笠原洋子、久保田敏子、後藤静夫、五野井隆史、高梨光正、田中悠美子、寺内直子、徳丸吉彦、中溝一恵、皆川達夫
［webコンテンツ構成］東正子

三、凡例

1. 年代の範囲

日葡間交渉がはじまる天文年間（16世紀中期）から、胡弓が広く受容されるようになったとみられる元禄年間（17世紀末頃）まで。

2. 記述内容

（1）日本における擦弦楽器の流入や使用の状況を示すとみられる史料、および、擦弦楽器とみられる楽器名称（小弓、こきう、鼓弓、胡弓、らべいか、rabeca、violas de arco　など）が記された史料。すなわち、キリスト教宣教師による通信文書類（キリシタン文書）や日本側の古文書・版本等における記述など。
（2）擦弦楽器とみられる楽器が描画された史料（絵画史料）。
（3）上記に関係するとみられる音楽芸能事項や歴史的事項。また、上記について考察する上で参考になると思われる歴史的事項など。
（4）上記に関する考察や資料情報など。

3. 記述方法

（1）フィールド（項目）の区分

＊「主　文」 史料からの引用文。その考察や備考
＊「分　類」 下記（2）参照。
＊「副文1」 一次史料に関する情報。著作者名、史料名、巻数、刊年（刊地）、注記。
＊「副文2」 参考資料に関する情報。翻刻・影印等の種別、資料名、巻数、注記。なお、参考資料は、代表的なものに絞り、簡略に記した。
＊「出典表」 キリシタン文書の該当部分をまとめた別表へのリンク。
＊「作業用」 図版等のファイルへのリンク（非公開。要パスワード。パスワード発行要件についての問い合わせは、研究代表者［takeuchi(アットマーク)kcua.ac.jp］まで。）

（2）「分類」の略号表記

本文の記述内容をわかりやすく提示するため、次のような略号を用いて分類した。

＊「語」 擦弦楽器（胡弓）の名称が記された日本側史料
＊「R」 擦弦楽器ラベカの名称が記された史料。

＊「V」 ヴィオラ・デ・アルコほか、ヴィオラ・ダ・ガンバにあたる擦弦楽器名称が記された史料。

＊「絵」 擦弦楽器が描画された史料。

(3)キリシタン文書類の史料情報

諸文書の成立事情が複雑であり、今後の調査の便宜をはかるために、

「キリシタン文書出典一覧」(pdfファイル)

を別途作成した。この一覧に記した書名および記号に基づいて、当該文書の頁数を示した「別表」を作成した。「別表」は、年表内の「出典表」項目から閲覧できる。

(4)史料の考証等

絵画史料の年代考証は、泉万里が担当した。

キリスト教宣教師による通信文書類(キリシタン文書)からの楽器名称の抽出や考証は、神戸愉樹美が担当した。

(5)歴史的事項や書誌的事項等については、主として下記を参照した。

- 『世界大百科事典』CD-ROM版、1991年、平凡社
- 『山川　詳説日本史図録』2008年、山川出版社
- 『洋學史事典』日蘭学会編、1984年、雄松堂出版
- 『新カトリック大事典』1996-2009年、研究社
- 『日本古典文学大辞典』1983-85年、岩波書店
- 『改訂増補　近世書林板元總覧』井上隆明著、1998年、青裳堂書店
- 『日本音楽大事典』1989年、平凡社
- 『ニューグローヴ世界音楽大事典』1993年、講談社

四、公開と更新

webでの公開は2011年12月28日に始めた。記事の更新は随時、予告なく行う。

更新日は、各データの行末に表示した。

なお、未見の史料や考証が十分でない史料も多く残されている。web公開の特性を生かし、随時、追加や補訂を行っていくので、お気づきの点があれば、研究代表者[takeuchi(アットマーク)kcua.ac.jp]までご教示願いたい。

最終更新:2012/2/2 公開:2011/12/28

copyrights: Research Centre of Japanese Traditional Music all rights researved.

胡弓に関する史料年表—16～17世紀—

序　年表をみる　研究情報

この年表は、16世紀以降に海外から日本に流入したとみられる擦弦楽器に関する史料、胡弓に関する元禄年間までの史料を俯瞰するものである。参照した史料は、キリスト教宣教師による通信文書類、日本側の古文書や版本、絵画史料等である。それらの引用や要約を記し、考証や備考、書誌や参考資料に関する情報等も加えた。
本年表の主旨・作成者・凡例は、「序」に記したので、必ずご参照いただきたい。（研究代表者：竹内有一）

◆年代ごとに表示する

天文-永禄 1541-1569
元亀-天正 1570-1591
文禄-慶長 1592-1614
元和-正保 1615-1647
慶安-寛文 1648-1672
延宝-貞享 1673-1687
元禄 1688-1703
すべての年代　1541-1703

◆史料の種別ごとに表示する

1） 擦弦楽器が描画された史料（略号「絵」）
2） ヴィオラ・デ・アルコほか、ヴィオラ・ダ・ガンバにあたる擦弦楽器名称が記された史料（略号「V」）
3） 擦弦楽器ラベカの名称が記された史料（略号「R」）
4） 擦弦楽器（胡弓）の名称が記された日本側史料（略号「語」）

◆語彙から絞り込む

キーワード　検索　リセット
（例：「胡弓」「こきう」「師宣」）

最終更新：2012/1/25 公開：2011/12/28

copyrights: Research Centre of Japanese Traditional Music all rights researved.

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
1	003	1541	天文10	ポルトガル船が鹿児島と豊後に着き交易を請う（翌年説あり）。			
2	004	1542	天文11				
3	005	1543	天文12	ポルトガル船（中国船説あり）が種子島に鉄砲を伝える（前年説あり）。			
4	006	1544	天文13				
5	007	1545	天文14	〈山口〉「スヾメ小弓に揚弓ノヒク手ハナレヌ上臈ヲ友ナヒツ」。雀小弓（すずめこゆみ）は遊戯用の小型弓。		『大内義隆記』成立年等不詳	翻刻『群書類従』
6	008	1546	天文15				
7	009	1547	天文16	大内義隆(1507-51）が最後の遣明船４隻を送る。勘合貿易は北京－京都間で1401-1547年に19回。			
8	010	1548	天文17				
9	011	1549	天文18	〈鹿児島〉ザビエルら（イエズス会）が鹿児島に到着、島津貴久より布教許可を得る。			
10	013	1550	天文19	〈琉球〉この頃、梅津少将（大内義隆家来）が琉球に漂着、月琴を嗜む兼城按司の娘と結婚。		太田南畝『琉球年代記』1832刊（江戸）	
11	012	1551	天文20	〈山口〉ザビエルが大内義隆に領内での布教を許される。山口での布教は大内氏の滅亡する1557年まで継続。			
12	014	1551	天文20	〈山口〉大内義隆が自刃。			
13	015	1552	天文21	〈山口〉宣教師トルレス　Torres,Cosme de（西 1510-70、1549来日）たちが日本で初めての降誕祭を歌ミサで行った。日本人信徒はそれを聞いて非常に喜んだ。（楽器に関する記述はない。本年以降も降誕祭の音楽についてしばしば記されるが、特記すべきもの以外は省略する。）			
14	016	1553	天文22	〈平戸〉アルメイダが布教と医療を行う。			
15	017	1554	天文23				
16	018	1555	弘治元	〈山口〉廃寺の大道寺を立て直し、日本初のキリスト教会が建立される。1557年焼失。			
17	019	1555	弘治元	〈平戸〉〈豊後〉毎日ミサが挙げられたという記録あり。（楽器に関する記述はない。）			
18	020	1556	弘治2	〈豊後〉バレト Nunes Barreto, Melchior（ポ Ca.1520-71、1556来日）の携帯品目録に単旋律聖歌集 Hum livro de canto chao と、多声楽聖歌集 Outro de canto d'orgao が記されている。		イエズス会は、典礼には単旋律聖歌［canto chao （ポ）、canto llano（西）, canto fermo（伊)］を許可していたが、布教地で効果がある場合は多声楽も認めていた。多声楽によるミサの記録は翌年1557年の復活祭が初出となる。	
19	821	1556	弘治2	〈豊後〉降誕祭で聖歌（頌歌 Cantigas）を伴った歌ミサを挙げる。（以後、降誕祭での類似の記述はしばしばみられるが、省略する。）			
20	021	1557	弘治3	〈豊後〉復活祭前の水曜日には、越冬したポルトガル人も参加して、合唱隊を二つにし、詩編とベネディクトゥスを多声楽聖歌 canto d'orgao で歌った。日曜には詩編とハレルヤを歌い行列 （約30人）。信者400人に食事が振る舞われた。（楽器に関する記述はない。）			

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
21	857	1557	弘治3	〈平戸〉リコーダーとオーボエ属の楽器が行列で演奏される。「ミサを歌って荘厳な行列を行った。… フラウタ fraut as とシャラメーラ charamelas を奏する（者が）進み…修道士二名の連祷に、我らが canto dorgao（多声楽聖歌）で答えた。」			
22	022b		永禄年間	〈堺〉通説では、永禄年間（1558-70）に堺に三味線が伝来。		藤本箕山『色道大鏡』1678序、ほか	
23	022a	1558	永禄元				
24	023	1559	永禄2				
25	024	1560	永禄3	〈京〉将軍足利義輝が畿内でのキリスト教布教を許す。			
26	025	1561	永禄4				
27	026	1562	永禄5	〈豊後〉西欧擦弦楽器の名称と使用について記したキリシタン文書の初出。すなわち、サンチェス Sanchez, Ayres（ポ1527-90、1561来日）が、病人の世話をし、修院 casaで日本人とシナ人15人の少年に読み書き、歌、および、弓で奏する楽器ヴィオラス・デ・アルコ violas darco を教える。	V	ヴィオラス・デ・アルコ violas de arco は、ヴィオラ・ダ・ガンバの古称で複数形。弓arcoで奏する弦楽器の意で、付加語のde arcoは、darco, d'arco, darq とも書かれる。ここでは複数形（ポ violas de arco、イタリア語写本violoni）で記されているので、複数の楽器が用いられている。当時の慣例によれば、ソプラノからバスまでの大中小のサイズを用いた合奏である。	
28	820	1562	永禄5	〈豊後〉領主大友宗麟（1530-87）を修院に招いて食事を共にし、その間、キリシタンの子弟がviolas darcoを演奏（歌に関する記述はない）。	V		
29	027	1563	永禄6	〈長崎〉聖母被昇天の祝日（8月15日）に、トレルスの誓願式を行うため、サンチェスが５～６人の少年をつれて豊後から横瀬浦（長崎）に来る。少年たちは晩祷とミサで奉仕するために violas d'arco を携える。少年達はすでにミサ[の侍者]を務めることができ、また適切にviola d'arco を弾く。	V		
30	028	1564	永禄7	〈豊後〉教会 igreia での復活祭で、ミサが良き歌とviolas darcoをもって行われる。修院で教育をうけた日本人の少年たちは、violas darco を十分に弾きこなし、歌も歌うことができた。	V		
31	029	1565	永禄8	〈豊後〉修院で、土曜日に violas de arco と共にサルヴェ・レジーナ（聖母マリアのためのアンティフォナ）を歌い、日曜日と聖人の祝日のミサで violas（de arco の省略語）を演奏し、聖歌motetesを唱えるが、すべては荘厳に行われる。	V		
32	030	1565	永禄8	〈豊後〉教会で、降誕祭の夜、食後に violas darco と多くの聖歌 motetes でミサを挙げる。	V		
33	031	1565	永禄8	〈京〉上杉本『洛中洛外図屏風』制作か。足利義輝が発注。（胡弓、三味線は描かれていない。）		狩野永徳画、米沢市上杉博物館蔵	
34	032	1566	永禄9				
35	033	1567	永禄10	〈長崎〉ポルトガル船が長崎に来航。			

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
36	034	1567	永禄10	〈イタリア〉作曲家モンテヴェルディが生まれる。			
37	035	1568	永禄11				
38	036	1569	永禄12	〈長崎〉トードス・オス・サントス（諸聖人）教会が建立。			
39	037	1570	元亀元	〈長崎〉ポルトガル船が長崎で初の交易。			
40	038	1571	元亀2	〈長崎〉この年以降、主として長崎がポルトガル船の定期寄港地となる。			
41	039	1572	元亀3	〈遠江〉三方原の戦の前夜（12月21日）に、織田信長家臣の平手甚左衛門が「にかいにしやみせんをたか＼／とこうたにてひかれ候て」。三味線に関する最初期の記録の一つ。		『陳善録』、成立年不詳。前田利家（1538-99）の晩年の回想談を家臣の村井長明(重頼、1582～1644)が書き留めたもの。『亜相公御夜話』『利家夜話』等の別名で類似の写本多数。	翻刻『大日本史料』
42	040	1573	天正元	室町幕府滅亡。			
43	801	1573	天正元	〈五畿〉復活祭にマテウスが河内三箇の教会で viola darco を弾く。	V		
44	041	1574	天正2	上杉本『洛中洛外図屏風』が織田信長から上杉謙信に贈られる。			
45	042	1575	天正3	〈薩摩〉島津家老中の日記に「しやひせん」の語の初出。		上井覚兼『上井覚兼日記』3月29日・4月10日条	翻刻『大日本古記録』
46	043	1576	天正4	〈京〉姥柳町に南蛮寺建立、献堂式。			
47	044	1577	天正5	〈京〉オルガンやその他の楽器、声楽家の派遣が布教に有効であることを、オルガンティーノがイエズス会に主張。			
48	045	1578	天正6				
49	046	1579	天正7	〈天草〉オルガンが伝来し、ミサで演奏された記録の初出。Realejo のような手風琴類でなく、パイプのついたオルガンとされる〔【K】 p.103〕。（この後のオルガン演奏記録は、有馬で1580年4月3日の復活祭に、豊後臼杵で10月4日の聖フランシスコの祝日に、高槻で1581年3月26日の復活祭にある。）			
50	048	1580	天正8	〈長崎〉ラベカ rabeca という楽器名がキリシタン文書に初出。トリエント公会議で多声楽聖歌等が制限されたことを受け、日本での布教の手段として種々の楽器や多声楽聖歌が有用か否か、また、『服務規程』で violla, arpa, rabeca 等を禁止すべきか否かも宣教師たちが協議したが、最終的には6月にヴァリニアーノが作成した『セミナリオ内規』で clavo e violas 等の楽器の使用が許可され、それらの教育が日課に盛り込まれた。なお、clavo, violla, arpa, rabeca の名称	R V		
51	049	1580	天正8	〈京〉「しやみせん」という表記の初出。三味線を弾いた人は「御かはら物山しろ」。		『御湯殿上日記』2月16日条、女官の日記	翻刻『続群書類従補遺』

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
52	050	1581	天正9	〈安土〉織田信長がセミナリオで、クラヴォ(鍵盤楽器)、ヴィオラ viola の演奏を聴く。また、当時の渡来の事物のうち日本人がもっとも好んだことは、オルガン、クラヴォ、Violas を弾奏することであったと宣教師が指摘。オルガンは安土と豊後に、クラヴォは各地にあった。	V	一般には viola は弦楽器を総称する語であるが、1562年以来日本のセミナリオで教育された楽器は一貫してviola de arco（ヴィオラ・ダ・ガンバの古称）であった。この伝統を踏まえると、信長の面前でセミナリオの生徒が演奏したviolaは撥弦楽器ではなくヴィオラ・デ・アルコである。日本全国の一年間の報告書「年報」に楽器名の詳細は不要であったと考えられる。	
53	051	1582	天正10	〈長崎〉天正遣欧使節がローマへ向け出発。			
54	803	1582	天正10	〈京〉織田信長（1534-82）没。			
55	052	1583	天正11				
56	053	1584	天正12	〈ポルトガル〉天正遣欧使節が、ヴィラ・ヴィソーザのブラガンサ公邸で、クラヴォと viola を演奏したり、それに歌をつけたりして、西欧人を感嘆させる。（9月16-18日滞在）	V		
57	054	1584	天正12	〈スペイン〉天正遣欧使節が、バルドの離宮（マドリードより北西７マイル）で国王フェリペ２世を待つ間、宿舎で violas de arco、クラヴォ、その他の楽器で音楽を楽しむ。（10月20日-11月3日滞在）	V		
58	055	1584	天正12	〈スペイン〉天正遣欧使節は、アルカラのコレジヨで毎日、種々の楽器（violas de arco、sytara、arpa、clavicordio 等）の妙なる演奏で歓待される。（11月26-28日滞在）	V		
59	056	1585	天正13	〈イタリア〉天正遣欧使節が、フィレンツェでメディチ家トスカナ大公フランチェスコ１世（1541-87）所有のオルガンを見学（3月10日）。一段鍵盤で、120余りの楽器の音色を出すことができ、その中に、viola、rabequinha 等がある。	R V		
60	057	1585	天正13	〈イタリア〉ヴィチェンツアの劇場でパッチェロの演説の後に viole（viola（伊）の複数形）の奏楽があり、少年団の歌とともに、天正遣欧使節を大いに喜ばせる。（7月11日滞在）	V		
61	058	1585	天正13	〈スペイン〉天正遣欧使節が、帰路のアルカラで、後日枢機卿となったドン・アスカニオ・コロンナより拝領した vn'arpicordo … harpe、liute、e viuole を関白への謁見時に演奏（10月15-17日滞在）。なお、viuole はイタリア語で弦楽器の複数形で、ヴァイオリン1本を含む。	V		
62	059	1585	天正13	〈ポルトガル〉天正遣欧使節が、コインブラの教会堂で、charamellas、realejo、arpa、cravo、violas de arco、rabeca 他の演奏を聴く。（12月滞在）	R V		
63	060	1585	天正13	〈山口〉フロイスが『日欧文化比較』の「日本の劇、喜劇、舞踏、歌および楽器について」の章において、viola(s)、琵琶、琵琶を弾く盲人に言及。	V		

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
64	061	1586	天正14				
65	062	1587	天正15	〈筑前〉豊臣秀吉が伴天連追放令（キリスト教宣教師の国外退去）を発令。宣教師は平戸に集結するも、再び各地に潜伏し、空文化。			
66	063	1587	天正15	〈摂津〉「三線」に「サミセン」とふりがなをつける初出。		山科言経『言経卿記』4月1日条	翻刻『大日本古記録』
67	064	1588	天正16				
68	065	1589	天正17	〈マカオ〉天正遣欧使節が、帰国途中の船上で、arpa、clavo、alaude（フロイス日本史は laude)、rabeca などを練習。	R		
69	067	1590	天正18	〈長崎〉天正遣欧使節が、様々な西欧楽器を携えて７月21日に帰国。日本に初めて伝来した一本のラベカ（ヴァイオリン）も含まれていた（no.58・65・70による）。	R		
70	069	1590	天正18	〈京〉朝鮮の使節が京に5ヶ月滞在、豊臣秀吉に会う。（朝鮮楽器の有無は未詳）			
71	070	1591	天正19	〈京〉豊臣秀吉が聚楽第で天正遣欧使節を引見。使節少年たちが、cravo、arpa、laude、rabequinha を演奏。さらに violas de arco、realejo も演奏。（rabequinha は、ラベカ rabeca の女性形単数縮小形で、今日のヴァイオリンに相当。写本には rabel … viguelas dearco （西）、印刷本には ribeca （伊）、barbiton（羅)と記される。）	R V		
72	071	1592	文禄元	〈長崎〉長崎に奉行所を設置。			
73	072	1593	文禄2	〈平戸〉バプチスタ（フランシスコ会）がフィリピン総督の使節として平戸に到着。			T.オイテンブルク『16～17世紀の日本におけるフランシスコ会士たち』1980年、中央出版社
74	073	1593	文禄2	〈長崎〉セミナリオの生徒たちが、八良尾に避難中、毎日曜日にオルガンのほか、viola d'arco、arpa、laude、viola〔viola semplice〕、cravo を伴ってミサを挙げる。なお、この「viola」は、イタリア語印刷本に「viola semplice」と翻訳されているので、リュート等の撥弦楽器でなくヴァイオリンに相当する。	V		
75	074	1594	文禄3	この頃よりイエズス会とフランシスコ会の対立表面化。			
76	075	1595	文禄4	〈天草〉イエズス会宣教師と日本人修道士による対訳辞書に「xamixen」の語が記される。		『羅葡日対訳辞書』、刊（天草）	
77	804	1595	文禄4	〈京〉検校がキリスト教徒になった記録あり。「検校の頭ウゴラ（Vgorandono 小倉？ウガ？）ジョーチンが改宗した。」			
78	077	1596	慶長元	〈土佐〉スペイン船サンフェリペ号が漂着。			
79	805	1596	慶長元	〈京〉検校がキリスト教徒になった記録あり。「検校がミゲルという名でキリシタンになった。」「50名ほどからなる検校達の中にはキリスト教徒となったものが5名いる。」			

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
80	078	1597	慶長2	〈長崎〉二十六聖人の殉教。			
81	079	1598	慶長3	豊臣秀吉没。			
82	080	1598	慶長3	南蛮屏風の一つに象が描かれる。前年、ルソン総督が豊臣秀吉に象を進呈（3度目の渡来）。		狩野内膳（1570-1616）『南蛮屏風』神戸市立博物館蔵	
83	081	1599	慶長4	〈江戸〉フランシスコ会の江戸教会成る。			
84	082	1600	慶長5	オランダ船リーフデ号が豊後に漂着。関が原の戦い。			
85	083	1600	慶長5	〈長崎〉この頃、初期洋風画『洋人奏楽図屏風』制作。西洋系の擦弦楽器等が描かれる。	絵	永青文庫蔵・ＭＯＡ美術館蔵	『国宝・重要文化財大全』1・2
86	084		（17世紀前期）	初期洋風画『田園遊楽図』制作。西洋系の擦弦楽器等が描かれる。	絵	伝山田右衛門。原本所在不明。	『国立歴史民俗博物館研究報告』75
87	811	1600	慶長5	教皇クレメンス8世がイエズス会に加えすべての修道会に日本での布教活動を認める。この頃より、南蛮屏風に、いろいろな修道会の修道会士が描かれる。			T.オイテンブルク『16～17世紀の日本におけるフランシスコ会士たち』1980年、中央出版社
88	851	1601	慶長6	〈長崎〉長崎大神学校が設立。			
89	085	1602	慶長7	〈平戸〉オランダ人・イギリス人が居住し貿易を始める。			
90	086a	1603	慶長8	江戸幕府が開府。			
91	086b	1603	慶長8	〈京〉出雲のお国のかぶき踊りの初出。「出雲ノ巫女国、歌舞妓躍ヲ京都ニ演ス」。		松平忠明ほか編『当代記』、寛永頃成立か	翻刻『大日本史料』
92	087	1603	慶長8	〈長崎〉日本人によるすぐれた聖歌隊の育成が進む。すなわち、コレジヨ（キリシタンの布教および聖職者養成のための神学校）では、生徒たちが多声楽聖歌・単声聖歌、および典礼に使用する cravos、orgaos、violas darco その他の楽器の演奏を学んでいるため、優秀な聖歌隊が育成され、司教は祝日や祭式を荘厳に執行している。	V		
93	088	1603	慶長8	〈長崎〉（日本人の）修道士が、clavos、ヴィオラス・デ・アルコ biguelas de arco（西） violes d'arche（仏）のほか、当時用いられた楽器の大多数を製作したとの記録あり。	V		
94	089	1603	慶長8	〈長崎〉宣教師が布教のために日本語を学ぶ『日葡辞書』の琵琶・三味線の項目で、violaの語を用いて説明。「ビワ（琵琶） ヴィオラ（弦楽器）」 Biua : Viola.「シャミセン（三味線） ヴィオラ（弦楽器）の一種で3弦」 Xamixen : Certa viola de tres cordas.	V		
95	090	1603	慶長8	〈長崎〉『日葡辞書』の和琴の項目で、rabecaの語が用いられる。「ワゴン（和琴）：らべかのような楽器」 Vagon : Instrumento musico como rabeca.	R		
96	091	1604	慶長9	〈長崎〉朱印船（29隻）がはじめて渡航。1635年まで継続。			

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
97	092	1604	慶長9	〈長崎〉『日葡辞書』補遺の東琴の項目で、viola de arco の語が用いられる。「アヅマゴト（東琴）　viola de arco（ヴィオラ・ダ・ガンバ）　のような、ある種の楽器。」Azzumagoto： Certo instrumento musico como viola de arco.	V		
98	093	1605	慶長10	徳川秀忠が二代将軍に。			
99	094	1606	慶長11				
100	095	1607	慶長12	朝鮮国王から徳川幕府への使節の派遣（朝鮮通信使）がはじまる。1811年まで全12回。第7回（1682年）以前の使節関係史料には、弦楽器の記載および描画は未確認。			
101	096	1607	慶長12	宣教師による、ヴィオラ（・デ・アルコ） viola と、ラベカ rabeca の最後の記述。すなわち、片桐且元の紹介で準管区長パシオ（伊1553-1612、来日1583）が大阪城の豊臣秀頼を表敬訪問し、viola、rabeca を演奏。別の写本には rabel、vihuela（西）、viole、rebec（仏）とある。その他、京、伏見、堺でもすべての修院で演奏。	RV		
102	097	1608	慶長13	〈浦賀〉マニラ船が家康の希望で浦賀に来航。			
103	098	1609	慶長14	「勾当城初ト云盲人同心候　シヤミセン小弓等持セ候　平家モ一句語候」（原本による）。公家の日記に、胡弓に相当する「小弓」という表記の初出。	語	西洞院時慶『時慶（卿）記』3月17日条、本願寺蔵	翻刻『大日本史料』
104	852	1609	慶長14	〈平戸〉オランダ東インド会社が家康より貿易の許可を得て商館を開設。			
105	099	1610	慶長15	幕府がスペイン人に通商を許可。			
106	100	1611	慶長16	〈長崎〉幕府が明人の長崎での貿易を許可。			
107	101	1612	慶長17	幕府が天領に禁教令を布達。			
108	858	1612	慶長17	〈バンタム・平戸〉英船が平戸へ出港する際に、セーリス船長（英）がコックス（翌年より平戸イギリス商館長）に楽器を購入させる。すなわち、トレブル・ヴァイオルTreble voyall（voyall は、viol の船員英語。Treble （高音）の小型のヴィオラ・ダ・ガンバのこと）と太鼓・笛 a Tabor and pipe。翌年、平戸到着の日に、平戸藩主が英船を訪問したときに、これらの楽器で音楽合奏（a good consort of Musicke）でもてなす。	V	Satow, Sir Ernest M,ed.『The voyage of Captain John Saris to Japan,1613』. London : printed for Hakluyt Society, 1900,pp.1,80.	村川堅固・尾崎義訳、岩生成一校訂『セーリス日本渡航記・ヴィルマン日本滞在記』（新異国叢書６）、1975、雄松堂書店、6頁/111頁。
109	102	1613	慶長18	〈平戸〉イギリス東インド会社が幕府から貿易の許可を得て商館を開設。幕府が禁教令を全国に布達。			
110	103	1614	慶長19	〈京〉キリスト教会堂を毀し宣教師を追放。			
111	104	1615	元和元	大坂夏の陣。			
112	106	1616	元和2	長崎・平戸の2港に外国船（唐船を除く）の入港を限定。徳川家康没。			
113	107	1616	元和2	〈平戸〉イギリス商館長コックスの日記に「shamshin」の表記。			『東京大学史料編纂所報』13
114	108	1617	元和3				

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
115	109	1618	元和4	幕府が葺屋町（現中央区日本橋人形町付近）に傾城町（遊郭）をつくることを許可し、翌年開業。葭原、のち吉原と呼ばれる。			
116	110	1619	元和5				
117	111	1620	元和6	〈長崎〉長崎奉行がキリスト教会・病院を毀す。			
118	112	1621	元和7	「ゆふ女ゆふくんあつまりて、…しやみせん　こきう　にあや竹や　しらへそへたる其中に石村けんきやう参りつゝ　うたのてうしをあけにけり」。	語	富山道冶『竹斎』上、刊（京）、仮名草子	翻刻『古典文庫』171
119	853	1621	元和7	秀忠がシャム使節と引見し、通商を許可。翌年シャムの日本人町全焼。			
120	113	1622	元和8	〈京〉７箇所の歌舞伎劇場が設置される。〈長崎〉キリシタンが55人処刑される（元和の大殉教）。			
121	114	1623	元和9	徳川家光が三代将軍となる。〈平戸〉イギリス商館閉鎖。日本人のルソン渡航が禁止。			
122	115	1624	寛永元	幕府がスペインとの通商を断絶。			
123	116	1625	寛永2				
124	117	1626	寛永3	〈長崎〉長崎奉行がキリシタン弾圧を強化し踏絵を制度化。			
125	118	1627	寛永4				
126	119	1628	寛永5				
127	120	1629	寛永6	〈長崎〉明楽を伝えた魏氏双侯が来日。日本の明楽を紹介する後世の文献（『魏氏楽譜』1768刊、『魏氏楽器図』1780刊）には擦弦楽器はみられない。			
128	121	1630	寛永7	幕府がキリスト教徒数十人をルソンに追放、キリシタン関係漢籍の輸入禁止を命ずる。			
129	122	1631	寛永8	幕府が奉書船の制度を開始（1635年まで）。従来の朱印状のほかに老中の奉書を長崎奉行に差し添えることで、海外貿易の統制を強化。主な奉書船貿易家は、末吉孫左衛門、平野藤次郎、角倉素庵、末次平蔵、茶屋四郎次郎、橋本十左衛門、三浦按針(2世）の７人。			
130	123	1632	寛永9	〈京〉末吉船図絵馬Ａが清水寺に奉納。胡弓は描かれていない。			
131	124	1633	寛永10	〈京〉末吉船図絵馬Ｂが清水寺に奉納。三味線が描かれるが胡弓は描かれていない。			
132	125	1633	寛永10	「三味線」という漢字表記の初出。		松江重頼編『犬子集』、刊（京）、俳諧集	影印『古典文庫』239・243
133	854	1633	寛永10	1609年から不定期に行われたオランダ商館長一行の江戸参府が制度化される。1790年まで毎年、1850年まで4年に一度実施。			
134	126	1634	寛永11	〈長崎〉出島築造に着手。			
135	855	1634	寛永11	琉球国王による江戸幕府への使節派遣（琉球使節）がはじまる。1850年までに18回。			
136	127	1634	寛永11	〈京〉角倉船図絵馬・末吉船図絵馬Ｃが清水寺に奉納。三味線が描かれるが胡弓は描かれていない。			
137	128	1635	寛永12	日本人の海外渡航と帰国、500石以上の大船建造を禁止。			
138	129	1636	寛永13	清国が成立。			

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
139	130	1636	寛永13	「琉球人之音楽聴聞　…　奏音楽、挽四線・三線・二泉（線）」。		鳳林承章『隔〓記』鹿苑寺蔵	翻刻『隔〓記』思文閣出版
140	131	1637	寛永14	島原の乱。			
141	133	1638	寛永15				
142	134	1639	寛永16	幕府が通商をオランダと中国に限定。いわゆる鎖国体制が確立。			
143	136	1640	寛永17	京都の遊廓（傾城町）が三筋町から朱雀野へ移転。この頃より島原と呼ばれる。京都の遊廓は1589年に秀吉が指定した二条柳町に始まり、1602年に六条柳町（三筋町）に移転。			
144	137	1641	寛永18	〈長崎〉オランダ商館が平戸から長崎に移転。			
145	806	1642	寛永19	〈京〉石村検校（？-1642）没。			
146	140	1643	寛永20	〈イタリア〉モンテヴェルディ没。			
147	143		寛永期	野外で胡弓（胴面円形）と三味線の合奏。	絵	『花下遊楽図屏風』第３扇、相国寺蔵（萬野美術館旧蔵）	『日本屏風絵集成』14、『肉筆浮世絵大観』7
148	144		寛永期	野外で胡弓、三味線、箏の合奏。傍に鼓。小鼓を打ち踊る人物も。	絵	『花下遊楽図屏風』第５扇、相国寺蔵（萬野美術館旧蔵）	『日本屏風絵集成』14、『肉筆浮世絵大観』7
149	145		寛永期	野外で胡弓（胴面円形）を弾く女、尺八を吹く男二人。他に三味線も。	絵	『観楓遊楽図屏風』フリーア美術館蔵	『日本の美術』483
150	146		寛永期	清水寺で胡弓を弾く男（盲人か）。別に三味線も。	絵	『露殿物語絵巻』逸翁美術館蔵	『近世風俗図巻』2
151	812		寛永期	野外（店先）で胡弓（胴面円形）とスリザサラの合奏。	絵	『職人尽絵』中島家旧蔵	『日本庶民生活史料集成』30
152	147		寛永期	寛永期の『南蛮屏風』2点（天理図書館蔵、大阪南蛮文化館蔵）に三味線が描かれる。現存する『南蛮屏風』（約60点）に胡弓描画は確認できない。			『南蛮屏風集成』
153	148		寛永-正保期	京のむしろ掛けの小屋で胡弓（半球形）を弾く男。	絵	『女歌舞伎図屏風』個人蔵	『日本屏風絵集成』13
154	149		寛永-正保期	胡弓（胴面円形）を弾く女。〈模写〉	絵	山東京伝『骨董集』1814-15刊（江戸）。原画は所在不明。同様の模写が多数ある（『三弦考』『〓庭雑考』『声曲類纂』所載）。	
155	151		寛永-正保期	胡弓（胴面円形）、三味線、尺八の合奏。〈模写〉	絵	『乙部屏風』乙部興業蔵。原画は所在不明。原画は前項と同じか。	『東洋音楽研究』14・15号、73号
156	152	1644	正保元	明滅亡。			
157	153	1645	正保2				
158	154	1646	正保3				
159	155	1647	正保4	ポルトガル使節が幕府に通商再開を請うが拒否される。以後幕末まで日葡交渉絶える。			
160	156	1648	慶安元				
161	157	1649	慶安2				
162	158	1650	慶安3	「琵琶の伝手を。てんじんと云こと如何。三味線小弓にすけるほどの者は。十人のうち七八人までは。てんじんといひ。比巴に携はる程の人は。皆伝手と云る也。是にて知べし。三味線小弓はいやしく。琵琶はけたかき物といふことを。」	語	安原貞室『かたこと』（器財部）、刊（京）、語学書	影印『近代語研究』3
163	159	1651	慶安4	徳川家綱が四代将軍となる。			
164	160	1651	慶安4	「松やにも　ひくは　こきうの　ねのびかな」、「こよひひけ　こきうの駒も　膝栗毛」。	語	令徳編『崑山集』1・9、刊（京）、俳諧集	翻刻『古典俳文学大系』1

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
165	161	1652	承応元	若衆歌舞伎の禁止。虎沢検校（？-1652）没。			
166	162	1653	承応2	野郎歌舞伎の許可。			
167	163	1654	承応3				
168	166	1655	明暦元				
169	167	1656	明暦2				
170	168	1657	明暦3	室内で、胡弓（床に立てて弾く）、三味線2、箏、尺八を合奏、踊り手1。	絵	『他我身のうへ』3、刊（京）、仮名草子。本文には胡弓の記述はなく「小うたさみせん」とだけ記載。	『近世文藝叢書』3
171	728	1657	明暦3	「皷太皷さはり三味線小弓などにて、はやし立てたり」。	語	津田藤兵衛『正事記』巻２、1665年頃成立	翻刻『名古屋叢書』23（随筆編6）
172	169	1658	万治元	鳩野宗巴が禁を犯して南蛮国へ渡り、3年間医術を学び帰国して開業。			
173	170	1659	万治2	京都で『伊曾保物語』（イソップ物語の翻訳）の絵入り本が初刊行。1590年に宣教師バリニャーノが原書を持ち込み、93年に天草で日本語訳ローマ字で印刷（西洋文学の翻訳本の最初）、元和年間に古活字版日本字で刊行、以後再刊多数。			
174	171	1660	万治3	野郎歌舞伎の役者が野外で胡弓、三味線、尺八、小鼓の合奏と踊り。	絵	『萬歳躍』、刊（京）。踊り歌集。弦数と糸巻の描画に不審あり。	『新編稀書複製会叢書』24
175	172	1661	万治4/寛文元	船上で胡弓、三味線、小鼓、尺八、太鼓の合奏。	絵	『板絵著色廻船入港図額』奈良：金峯山寺蔵（万治4年正月の墨書）	『国宝・重要文化財大全』1・2
176	174	1662	寛文2	「又は三味線　鼓弓　引ならして歌うたひ、ほそらかなるこゑを帆にあげて」（三俣の項）。挿絵に三味線は描かれているが、胡弓は描かれていない。	語	浅井了意『江戸名所記』4、刊（江戸）、仮名草子	影印『新編稀書複製会叢書』30、翻刻『江戸叢書』2
177	175	1662	寛文2	「大坂の川舟に幕はしらかし…、笛太鼓つゝみ三味線　鼓弓　色いろの拍子物」（住吉潮干の項）。挿絵に楽器はない。	語	中川喜雲『案内者』2、刊（京）、年中行事の案内書	影印『近世文学資料類従　仮名草子編』9、翻刻『続日本随筆大成』
178	185	1663	寛文3	「あまてらす　月は　こきう　の弓張て　めたなばたもぞ　げに一夜妻」（北村季吟）。	語	『貞徳誹諧記』上、1663年刊か（京）、俳諧集	影印『近世文学資料類従　古俳諧編』39、翻刻『古典俳文学大系』1
179	177	1664	寛文4	「抑日本に三味せむをひき初し事は、文禄のころほひ、石村検校と云びわ法師あり、…　かの嶋に　小弓　といひて、糸三筋にてならす物有、…　此嶋には真蛇の多き所なるが、らへいか　といふものありて此まむしを食物とする、されば　らへいか　のなく声、小弓　の音に少もちがはざる故、真蛇を退んが為に、専引也」。胡弓の挿絵はない。	語R	中村宗三『糸竹初心集』、刊（京）、音楽書	影印『日本歌謡研究資料集成』3、翻刻『日本歌謡集成』6
180	178	1665	寛文5				
181	179	1666	寛文6	江戸の野郎歌舞伎舞台で、三人の役者が胡弓、三味線、スリザサラを合奏。	絵	『難野郎古たゝみ』、刊、役者評判記	『新編稀書複製会叢書』22
182	180	1667	寛文7				
183	181	1668	寛文8	幕府が貿易禁制品目を定める。			
184	182	1669	寛文9	「小弓　沙味線　琴　琵琶」（「引」の項）。	語	高瀬梅盛『便船集』、1669跋刊（京）、俳諧語集	
185	183	1670	寛文10	「在々熊本町より役者を呼申間敷候、付り、踊子・春駒・しゝ舞・りうご引・目明之しやみせん引・こきう引　…　右之者ハ在々御停止被仰付候」。	語	中山昌礼(1762-1816)編『井田衍義』熊本県立図書館蔵、肥後郡村の政治経済書	翻刻『藩法集』7

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
186	729	1670	寛文10	「小弓のゆみの三ヶ月の影」。この「小弓」が楽器の意か、玩具の弓の意かは未詳。同様の事例は多数ある。	語	顕成編『続境海草』、1670序刊、堺俳壇の俳諧撰集	翻刻『古典俳文学大系』3
187	184	1671	寛文11	「小弓　シヤミセン　吹物フキナラシ」。	語	立原翠軒（1744-1823）『呂宋覚書』同志社大学図書館蔵。呂宋（ルソン）に航海した川淵久左衛門の談話記（寛文11年辛亥歳8月18日）の後世の写し。	影印『同志社大学貴重書デジタルアーカイブ』web
188	720	1672	寛文12	「尺八よ　琴よ　小弓よ　三線よ」（寛文5年7月興行の句会）。	語	松江重頼編『俳諧時勢粧』４下、1672跋刊、俳諧集	翻刻『古典俳文学大系』２
189	807	1672	寛文12	伊勢の間の山の女芸人と推察される「お玉」の名の初出。「玉子じやとおしゃるといふ小うたを…伊勢のおたまが事にでれば、玉の句といはんに…」（11番）、「伊勢のお玉はあぶみかくらかといへる小哥なればたれも乗たがるは断なるべし…」（17番）		松尾芭蕉編『貝おほひ』、刊（江戸）	影印『談林俳諧集』
190	186	1672	寛文12	明楽を伝えた魏氏帰化。翌年、内裏で明楽を演奏。（1629年項参照）			
191	187		寛文期	室内で胡弓、箏、尺八の合奏。	絵	『うき世物語』1、刊（京）	『仮名草子集成』6
192	188		寛文期	室内（しまばらあげや）で胡弓と三味線の合奏（ほかに三味線、鼓、尺八も）。	絵	藤川吉信『都名所図巻』個人蔵	『近世祭礼・月次風俗絵巻』
193	189		寛文期	胡弓（胴面円形）を弾く女。〈模写〉	絵	喜多村信節『〓庭雑考』（紅葉見の遊山の図）1843序、国会図書館蔵。原画は所在不明。	『日本随筆大成』
194	190		寛文期	室内で胡弓、箏、三味線、小鼓の演奏。ほかに尺八も。	絵	『室内遊楽図』萬野美術館旧蔵	『肉筆浮世絵大観』7
195	191		寛文期	床の間に胡弓と三味線が並置。	絵	『士女遊楽図屏風』MOA美術館蔵	『肉筆浮世絵大観』4
196	192		寛文期	野外で三味線を弾く瞽女の傍に、胡弓をもつ小人。	絵	『春秋遊楽図屏風』（『野外遊楽図屏風』とも）麻布美術工芸館旧蔵。年代不詳（寛永後期から明暦説あり）。岩佐勝重（？-1673）画か。	『麻布美術館図録』
197	193		寛文期	室内で胡弓、三味線、小鼓、箏の演奏。	絵	『邸内遊楽図屏風』京菓子資料館蔵。寛文期末か。	『江戸の遊戯』
198	194	1673	延宝元	〈長崎〉イギリス船リターン号入港、通商再開を求め拒否される。			
199	808	1674	延宝2	「浄瑠璃を語り筑紫琴三味線皷弓抔之座頭芸一切不可仕琵琶の義古来より地神経戴弾来候間可為其通但座頭之琵琶所持仕間敷事」。	語	『当道大記録』「延宝二寅年地神経一件之事」	翻刻『奥村家蔵当道座・平家琵琶資料』30頁（49頁にも類似文あり）。奥村家本以外の伝本『当道大記録』、『徳川禁令考』にもみえる。
200	196	1675	延宝3	「つねに、なぐさみたまふべきものは、琴、びわのたくいなり、かりそめにも、さみせん、こきうなと、てなれたまふへからず」（女子におしゆへき事）。	語	小亀益英『女五経』5、刊（京）、仮名草子	翻刻『仮名草子集成』10
201	198	1676	延宝4	「らべいかで　名残を惜しむ　歌も有」（花楽軒蝶々子）。	語R	蝶々子編『誹諧当世男』付句：恋、刊（江戸）、竹冷文庫蔵、俳諧集	翻刻『古典俳文学大系』3（誤刻あり）
202	199	1676	延宝4	「小弓　三味線　琴　琵琶」（「引」の項）。	語	高瀬梅盛『類船集』、刊（京）、俳諧語集	影印『近世文藝叢刊』1、翻刻『古典俳文学大系』17
203	200	1677	延宝5				

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
204	201	1678	延宝6	「この頃はよく引く人もなければ、…むかしの小弓（ルビ：こきう）は弓の弦をいたく」（7巻）、「次小弓尺八之音声異干他也」（17巻）。	語	藤本箕山『色道大鏡』1678序、色道論書	影印『色道大鏡』八木書店、翻刻『新版　色道大鏡』八木書店
205	202	1678	延宝6	「音楽の　小弓　三味線　相の山」。	語	信徳編『江戸三吟』、刊（京）、俳諧集	翻刻『古典俳文学大系』5
206	203	1679	延宝7				
207	204	1680	延宝8	徳川綱吉が五代将軍となる。			
208	205	1680	延宝8	「笛、太鼓、つゞみ、三味線、鼓弓」（2巻）、「琴、三味線、笛、太鼓、つゞみ、鼓弓」（4巻）。	語	一無軒道冶『難波鑑』、刊（大坂）、地誌	影印『近世文学資料類従　古板地誌編』1、翻刻『近世文芸叢書』1
209	809	1680	延宝8	柳川検校（？-1680）没。			
210	206	1681	延宝9/天和元	「琉球つゝじ　虻ぞ鼓弓をしらべける」。	語	言水編『東日記』、刊、俳諧集	影印『天理図書館綿屋文庫俳書集成』28、翻刻『古典俳文学大系』3
211	209	1681	延宝9/天和元	古浄瑠璃段物集の挿絵に、伊勢の間の山の女芸人2名。胡弓は描かれていない。		宇治加賀掾正本『乱曲揃』、刊（京）	
212	861	1681	延宝9/天和元	室内で、胡弓、三味線2、箏、小鼓の合奏。	絵	玉門寺隠居『吉原三茶三幅一対』、刊、遊女評判記	影印「国立国会図書館デジタル化資料」（webサイト）、影印『近世文学資料類従　仮名草子編』36
213	207		延宝期	歌舞伎舞台で、胡弓と三味線に合わせて男たちが踊る。	絵	『歌舞伎舞台図屏風』個人蔵	『肉筆浮世絵集成』1
214	208		延宝期	江戸の野外で胡弓、三味線、尺八、小鼓、太鼓の合奏。（盆踊）	絵	『東の錦』個人蔵	『近世祭礼・月次風俗絵巻』
215	197		延宝期	「三味線ト小弓ノ音ハ　…、三味線ハ蛇皮、小弓ハ、ラベイカト云リ」。	語R	『滑稽太平記』稿本（延宝期成立か）、国会図書館ほか蔵、俳諧逸話集	翻刻『古典俳文学大系』2
216	211	1682	天和2	桜の下で胡弓（胴裏の描画に特徴あり）、三味線、箏の合奏。	絵	菱川師宣『絵入貞徳狂歌集』上、刊（江戸）	影印『新編稀書複製会叢書』12
217	212	1682	天和2	「琴三味線にて囃すもあり、尺八　鼓弓で合わすもあり」。	語	戸田茂睡（1629-1706）『紫の一本』（1680以前に成立し1682以後に浄書加筆されたか）、天理大学図書館ほか蔵、江戸の地誌・随想	翻刻『新編日本古典文学全集』82
218	862	1682	天和2	「一きよくをさゝらこきうにのせて」。挿絵に門説経(三味線、ささら)が描かれるが胡弓は描かれていない。	語	『このころ草』、刊、挿絵は菱川吉兵衛(師宣)画	影印『新編稀書複製会叢書』34
219	213	1683	天和3	「ひとり鞁弓をつくすよすがら」（一晶）。	語	芭蕉編『故艸（ヘボチグサ）』、猪来編の俳諧撰集『蓑虫庵小集』（1824年刊）に収録	翻刻『芭蕉連句全註解』3
220	214	1684	天和4/貞享元	「琴…しやみせん…こきう　とりなをして」。	語	菱川師宣『団扇絵づくし』、刊（江戸）、絵本	影印『天理図書館善本叢書』
221	215	1684	天和4/貞享元	室内で胡弓（胴裏の描画に特徴あり）、三味線、箏の合奏。	絵	菱川師宣『団扇絵づくし』、刊（江戸）	影印『天理図書館善本叢書』
222	216	1684	天和4/貞享元	「座頭に　胡弓　三〔味〕線をひかせあて〔やか〕成女小人など品々つくろひ」（江戸）。挿絵はない。	語	一雪『古今犬著聞集』8、説話集。享保以降の転写本（東北大学狩野文庫・京都大学蔵）のため「胡弓」という用字の初出とは認め難い。	翻刻『仮名草子集成』28

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
223	218	1684	天和4/貞享元	節用集の項目に「こきう」と読む「小弓」の初出。項目「小弓」（ふりがな「こゆみ」）の「弓」に「きう」と記す。以後の節用集ではたびたび立項され、享保刊『書言字考』では、三味線の類と語釈する「鼓弓」という用字が初出し、1806年刊『字引大全』に「胡弓」という用字が初出する。	語	『頭書増補二行節用集』、刊、節用集	影印『節用集大系』17
224	219	1685	貞享2	野外で胡弓（胴裏白色）、三味線、箏、尺八、太鼓、小鼓、横笛の合奏。	絵	菱川派『変化画巻』ボストン美術館蔵。師宣の画をその門弟が貞享２年に模写したもの。合奏部分には師宣の自署なし。	『肉筆浮世絵』1
225	813	1685	貞享2	八橋検校（1614-85）没。〈長崎〉ポルトガル船が伊勢の漂民を護送し入港。			
226	220	1686	貞享3	「伊勢の古市、…　間の山節　〈あさましや往来の人に名をながす〉　と、いづれがうたふも同音にしておかしかりき。」（楽器の描画はない）		井原西鶴『好色一代女』巻6、刊	
227	751	1686	貞享3	「思へど中はあいのやまかな　―　世のぬれもの　おすぎおたま」（目録）。「あいの山いせにあり　所はひなのすまひながら。其かたちうるはしくて、都はづかし、さみ、こきうにえならぬ哥うたひて、よねんなくゐけるを」「さいつ比より、いとのあみをはりて、其うちに哥うたひてゐける、おすぎ、おたまといひし、此所のびじよなりしも」。（挿絵に胡弓は描かれていない）	語	西村市郎右衛門『好色伊勢物語』巻4、刊	翻刻・影印『古典文庫』426
228	752	1687	貞享4	「あいの山。お杉お玉が庵。」（挿絵に胡弓は描かれていない）		西村市郎右衛門『好色旅日記』、刊（京）	翻刻・影印『古典文庫』50
229	222		貞享期	野外で胡弓（胴裏茶色）、三味線、小鼓、尺八、太鼓の合奏。	絵	菱川派『江戸四季風俗図巻』ボストン美術館蔵	『肉筆浮世絵』1、『ボストン美術館蔵浮世絵展』
230	223	1688	元禄元				
231	224	1689	元禄2				
232	226	1690	元禄3	「小弓引、伊勢会山より」「小弓はもとは」「小弓に」「小弓引、編木摺は」（門説経の説明文）。	語	『人倫訓蒙図彙』7、刊	
233	227	1690	元禄3	街頭で胡弓、三味線、スリザサラの合奏。	絵	『人倫訓蒙図彙』7、刊	
234	228	1691	元禄4	ケンペル Engerbert Kaempfer（1651-1714,1690年来日）が江戸参府旅行の途上で、胡弓とみられる楽器を観察。「乞食は、…　歌を歌い、胡弓を弾き〈viol（Scheuchzer/Michel）、Violinen（Dohm）〉、三味線を奏で citter spiel（Scheuchzer/Michel）、Zitterspielen（Dohm)〉　…　通りがかりの旅人から穴あき銭を集める」。（ドームDohm版とショイヒツアー/ミシェル Scheuchzer/Michel		【Dohm版】Christian Wilhelm Dohm.『Engelbert Kampfer : Geschichte und Beschreibung von Japan』. Lemgo: Meyerschen Buchhandlung 1777-1779; repr. Stuttgart: Brockhaus 1964 ; 今井正編訳『日本誌』霞ヶ関出版、1989改訂版。【Scheuchzer/ Michel版】Wolfgang Michel, 『Engelbert Kaempfer : Heuti	
235	708	1692	元禄5以降、宝永1以前	「小弓は中嶋九助。朝都なんどを。はじめとすとかや」	語	『好色由来揃』国会図書館蔵、刊（京）、浮世草子。『好色大鑑（日本好色名所鑑）』（元禄５、原本消失）の改題本。『好色由来揃』の改題本『傾城国土産』（宝永１）にも同文がある。	翻刻『近世文芸叢書』10
236	229	1692	元禄5-6	江戸の野外で胡弓、三味線、箏、小鼓、尺八、太鼓の合奏。	絵	菱川師宣『江戸名所風俗図巻』個人蔵	『國華』1357

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
237	230	1692	元禄5-6	江戸の野外で胡弓、三味線、箏、小鼓、尺八、太鼓の演奏。	絵	菱川師宣『十二ヶ月風俗図巻』静嘉堂文庫美術館蔵	『國華』1357
238	242	1694	元禄7以前	江戸の野外で胡弓、三味線、箏、小鼓、尺八、太鼓の合奏。	絵	菱川師宣『江戸風俗図巻』出光美術館蔵	『近世風俗図巻』1
239	243	1694	元禄7以前	江戸の野外で胡弓、三味線、小鼓、尺八、太鼓の合奏。	絵	菱川師宣『上野花見図屏風』ボストン美術館蔵	『肉筆浮世絵』1
240	856	1694	元禄7	「又間の山の乞食、昔は遊女のごとく…　中にもおたま・おすぎとて、ふたりの美女あつて　…　三味線を引きならし、あさましや女のすゑ　と伊勢ぶしをうたひける。」		井原西鶴『西鶴織留』巻4、刊	影印『近世文学資料類従西鶴編』16
241	231	1694	元禄7	菱川師宣没。			
242	236	1695	元禄8以前	歌舞伎道具尽しの中に胡弓ほか。	絵	『新板　役者絵尽』、刊。古山師重画か。刊年は役者名による。	『新編稀書複製会叢書』18
243	814	1695	元禄8頃	「こと　さみせん　こきう　尺八　一よ切。はやりをどりのはやりうた　手をつくしてぞ　しらへける」。祝儀の席で数人の検校・座頭が演奏したり踊ったりする場面。挿絵に胡弓は描かれていない。	語	宇治加賀掾正本『飛騨内匠』、刊、元禄8年頃上演か	翻刻『古浄瑠璃正本集　加賀掾編3』
244	233	1696	元禄9				
245	721	1697	元禄10	「胡弓の弦を半間弾出ス」。刊本における「胡弓」という用字の初出か。	語	天野桃隣編『陸奥衞』４、1697跋刊（京・江戸）、俳諧集	翻刻『古典俳文学大系』７
246	235	1698	元禄11	「行秋を　鼓弓の糸の　恨かな」（河合乙州）。	語	沾圃ほか編『続猿蓑』下：秋之部暮秋、刊（京）	翻刻『古典俳文学大系』6
247	237	1699	元禄12以降	「長崎阿蘭陀出島之図」にヴィオラ・ダ・ガンバ等の楽器が描かれる。	絵	『漢洋長崎居留図巻』絵師・原画未詳（渡辺秀石画の転写か）、長崎歴史文化博物館蔵	『出島図』1987年、長崎市
248	238	1700	元禄13				
249	239	1701	元禄14	京歌舞伎「けいせい嵯峨野原」間の山の場面で、胡弓（猿役の泉川百助）とスリザサラ（坂田藤十郎）。	絵	『役者略請状』、刊（京）	『歌舞伎評判記集成』3
250	810	1701	元禄14	「座頭尚都世都　中之丸へ被為召　於御書院　琴琵琶三味線胡弓尺八被仰付」。	語	岡嶋正義（1784-1859）編『因府年表』1842年頃、鳥取県立公文書館蔵	翻刻『鳥取県史』
251	240	1702	元禄15				
252	241	1703	元禄16	「こきう　さみせんなるこのなはもひく」。	語	秀松軒編『松の葉』2：長歌32「引車」、刊（京）	影印『日本歌謡研究資料集成』4、翻刻『日本歌謡集成』6
253	244		元禄期	野外で胡弓（胴裏茶色）と三味線の合奏。	絵	菱川派『四季遊楽図屏風』右隻第６扇、個人蔵	『日本屏風絵集成』14
254	245		元禄期	野外で胡弓、三味線、箏、小鼓、尺八、太鼓の合奏。	絵	菱川派『四季遊楽図屏風』左隻第３扇、個人蔵	『日本屏風絵集成』14
255	859		元禄期	野外で胡弓、三味線、箏、小鼓、尺八、太鼓の合奏。	絵	菱川派『邸内邸外遊楽図屏風』右隻第５扇、江戸東京博物館蔵	『日本の美術』363
256	860		元禄期	野外で胡弓（胴裏が茶色）と三味線の合奏。	絵	菱川派『邸内邸外遊楽図屏風』左隻第１扇、江戸東京博物館蔵	『日本の美術』363
257	246		元禄期	室内で三味線を演奏する後方に、胡弓（半球形）、三味線、鼓が並置。	絵	『邸前遊楽図屏風』萬野美術館旧蔵。『遊興風俗図屏風』と同じ構図。	『肉筆浮世絵大観』7
258	247		元禄期	室内で三味線を演奏する傍に箏、後方に胡弓（半球形）、三味線、鼓が並置。	絵	『遊興風俗図屏風』プライス美術館蔵。『邸前遊楽図屏風』と同じ構図。	『プライスコレクション―若冲と江戸絵画』
259	248		元禄期	野外で、胡弓（胴裏茶色）、三味線、箏、尺八、小鼓、太鼓の合奏。	絵	伝菱川師平『花見遊楽・青楼遊興図屏風』個人蔵。『春秋遊楽図屏風』と類似の構図。	『國華』1341
260	249		元禄期	野外で、胡弓（胴裏茶色）と箏、三味線と尺八、小鼓と太鼓の合奏。	絵	菱川師平『春秋遊楽図屏風』出光美術館蔵。『花見遊楽・青楼遊興図屏風』と類似の構図。	『日本屏風絵集成』14、『出光美術館蔵品図録』

	登録番号	西暦	和暦	主文	分類	副文１	副文２
261	250		元禄期	野外で胡弓（胴面円形）とスリザサラの合奏。	絵	『月次風俗諸職図屏風』右隻第１扇、堺市博物館蔵	『堺市博物館優品図録』
262	251		元禄期	楽器屋の店先に胡弓（胴面円形）、三味線、箏が並置。	絵	『月次風俗諸職図屏風』右隻第５扇、堺市博物館蔵	『堺市博物館優品図録』
263	252		元禄期	野外で胡弓を立って弾く男、横に楽器（三味線か胡弓）を持つ女。	絵	『月次風俗図屏風』たばこと塩の博物館蔵	『近世初期風俗画』たばこと塩の博物館
264	253		元禄期	野外で胡弓と尺八の合奏。	絵	『吉野花見図屏風』リンデン民族博物館蔵	『秘蔵日本美術大観』12、『江戸と明治の華皇室侍医ベルツ博士の眼』
265	257		元禄期	野外（戸口）で胡弓とスリザサラの合奏。	絵	『遊芸人図屏風』世田谷区大場代官屋敷保存会蔵	『近世の絵画』（世田谷区郷土資料館）、『江戸の庶民信仰』
266	239		元禄期	野外で胡弓、三味線、箏、尺八の合奏。	絵	菱川派『花見図屏風』島根県立美術館蔵。元禄末（元禄14とも）。	『浮世絵芸術』134
267	254		元禄期	野外で胡弓、三味線、箏、尺八、小鼓、太鼓の合奏。	絵	宮川長春『春秋遊楽図屏風』右隻第４扇、個人蔵。元禄末。	『肉筆浮世絵集成』1
268	255		元禄期	野外で胡弓（胴裏茶色）、三味線の合奏。	絵	宮川長春『春秋遊楽図屏風』左隻第１扇、個人蔵。元禄末。	『肉筆浮世絵集成』1
269	256		元禄11-宝永6	室内で胡弓、三味線の合奏。	絵	英一蝶『四季日待図巻』出光美術館蔵、三宅島配流中（1698-1709）の画作	『肉筆浮世絵集成』7、『やまと絵の譜』

胡弓年表 キリシタン関係 文書の出典

2011.8.10 神戸愉樹美

この件にかかわるキリシタン文書の手稿ms.は、当時の写しを含めて次のコレクションに納められている。
【MI】ローマ、イエズス会文書館 Archivum Romanum Societatis Iesu, *Japonica Sinica*（*Jap.Sin.*).
【MA】リスボン、アジュダ図書館 Biblioteca da Ajuda, *Jesuitas na Asia, Cod.*（＊）
【MN】リスボン、国立図書館 Biblioteca Nacional, *Cod.*
【MB】ロンドン、大英図書館 British Library, Marsden Manuscript, *Add.Mss.*
【MM】マドリッド、王立図書館 Biblioteca de la Real Academia de la Historia, *Cortes.*
影印は、主に上智大学キリシタン文庫に、（＊）の一部は、東京大学史料編纂所、東洋文庫にある。

参考資料：尾原悟『キリシタン文庫』南総社 1980

以下に記す【A】から【H】は、上記所蔵の原文書から、16-20世紀にわたって出版された主要な翻刻、その影印、邦訳書で、事項ごとにまとめて記した。それぞれの項目内での記載順は、出版年の編年体である。年表主文の典拠頁数は、別表参照。

●1552西欧人による初降誕祭の記録、1561－1580の楽器伝来、大友宗麟、ヴァリニャーノ会議の報告まで

【A】*Iesvs. Cartas que os padres e irmãos da companhia de Jesus, que andão nos reynos de Japão escreverão aosda mesma companhia da India, e Europa, des do anno de, 1549, ate o de 1566,*（Coimbra: Antonio de Maris, 1570）ポルトガル語。

【A1】*Iesvs. Cartas que los padres y hermanos de la Compañia de Iesus, que andan en los reynos de Iapon escriuieron a los de la misma Compañia, desde el año de 1549, hasta el de 1571*（Alcalá: Iuan Iniguez de Lequerica, 1575）スペイン語、抄訳部分がある。

【A2】*Iesvs. Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, desde anno de 1549 até o de 1580, Primeiro Tomo. … Impressas por mandado do Reuerendissimo em Christo Padre dom Theotonio de Bragança Arcebispo d' Euora…,*（Euora: Manoel de Lyra 1598）ポルトガル語。

【A3】影印版：『イエズス会士日本通信』、1972, 東京、雄松堂書店。[天理図書館善本叢書、洋書之部第２期1])。

【A4】村上直次郎訳・柳谷武夫編輯 1968/1969a『イエズス会士日本通信』豊後下篇 上／下、東京、雄松堂書店。（新異国叢書 1／2）。

【A5】松田毅一監訳 1997『十六・七世紀 イエズス会日本報告集』第 III 期1巻、1998 III-2、1998 III-3、1998 III-4、1992 III-5、東京／京都、同朋舎。

【A6】Wicki, Josef（西 1904-1993), 'Document Indica III', *Monumenta Missionum Societatis Iesu*, vol.74（Roma 1954）当該文書はポルトガル語、説明文はラテン語。

●1581 織田信長のセミナリヨ訪問 日本人が好んだもの

【B】上記【A2】の第二部＜年報＞。 *Segunda parte das cartas de Iapão que escreuerão os padres e irmãos da Companhia da Iesus*（Euora: Manoel de Lyra 1598）ポルトガル語。

【B1】影印版： 1972『イエズス会士日本通信』, 東京、雄松堂書店。[天理図書館善本叢書、洋書之部第２期1])。

【B2】村上直次郎訳・柳谷武夫編輯 1969b/1969c『イエズス会日本年報』上／下、東京、雄松堂書店。（新異国叢書3／4）。

【B3】松田毅一監訳 1991『十六・七世紀 イエズス会日本報告集』III-6、京都、同朋舎。

●1584－1585 天正遣欧少年使節行記

【C】J.A.Abranches Pinto・Yoshitomo Okamoto・Henri Bernard S.J., "La Premiere ambassade du Japon en Europe 1582-92, Première Partie le Traité du Père Frois", *Monumenta Nipponica Monographs* 6、（東京：上智大学 1942,).当該文書はポルトガル語、説明文はフランス語。

【C1】フロイス、ルイス原著 岡本良知訳註 1942『九州三侯遣欧使節行記』、東京、東洋堂。

【C2】東京大学史料編纂所 1961『大日本史料』、東京、第 11 編別巻之 2。（邦訳文史料、及び 欧文史料）。

●1585 日欧の文化比較の書

【D】原文ポルトガル語の翻刻とドイツ語訳。Schütte, Josef Franz.（独 1906-1981, 1930-1932, 1954-57 来日）"Kulturgegensätze Europa-Japan (1585)", *Monumenta Nipponica* 15.（東京:上智大学 1955)。[典拠しているms.は、Luis Frois, *Tratado em que se contem muito susintae abreviadamente algumas contradições e diferenças de custumes antre a gente de Europa e esta provincial de JAPÃO*].

【D1】岡田章雄訳 1965『日欧文化比較』、東京、岩波書店。（大航海時代叢書 XI）。ルイス・フロイス著 岡田章雄訳注 高瀬弘一郎修正加筆 1991『ヨーロッパ文化と日本文化』東京、岩波書店。（岩波文庫）。

【D2】松田毅一・ヨリッセン、エンゲルベルト 1983『フロイスの日本覚書』、東京、中央公論新社。（中公新書）。

●1590－1596 天正使節の帰国、豊臣秀吉の引見、検校の記録

【E】Hayo, Ioanne, *1591,2, Literae Annuae*（Roma. 1605）. ラテン語。

【E1】松田毅一監訳 1987a『十六・七世紀 イエズス会日本報告集』第 I 期 1 巻、1987b I-2、京都、同朋舎。

【E2】片岡千鶴子訳 1968『八良尾のセミナリヨ』キリシタン文化研究シリーズ3。

●フロイスによる当時の通史（1549-1593年の編年記録 1597没前に下関で完成）

【F】Wicki, José, *Historia de Japam Frois, P.Luis. S.J.,*（Lisboa: Biblioteca Nacional, I, 1976/ III, 1982/ V, 1984）. ポルトガル語。[典拠しているms.は、L.Frois, *Historia de Iapam*, 1549-1578年は、【MA】 *cod.49-IV-54*. 1578-1581年は、【MN】 *cod. 9448* 他、1588-1593年は、【MA】 *cod.49-IV-57* 他.].

【F1】フロイス、ルイス原著 岡本良知他編訳 1949『九州三侯遣欧使節行記 続編』、東京、東洋堂。

【F2】松田毅一・川崎桃太訳 1977『フロイス日本史』2 巻 豊臣秀吉篇 II、東京、中央公論社。5 巻 1978 五畿内篇 III。6 巻 1978 豊後篇 I。7 巻 1978 豊後篇 II。9 巻 1979 西九州篇 I。10 巻 1979 西九州編 II。11 巻 1979 西九州編 III。12 巻 1980 西九州篇 IV。

●1603／4『日葡辞書』

【G】*Vocabvlario da Lingoa de Iapam.*（Nagasaqui: Collegio de Iapam da companhia de Iesvs 1603/4). ポルトガル語。

【G1】影印版 亀井孝 1973 初版 1978 第 3 版『日葡辞書』、東京、勉誠社。

【G2】土井忠生、森田武、長南実編訳 1980『日葡辞書』、東京、岩波書店。

【G3】*Vocabvlario de Iapon.*（Manila: Companhia de Iesvs…Colegio de Santo Thomas 1630). スペイン語。

【G4】天理図書館本複製第54号 1978 1630年マニラ版『日西辞書』、東京、雄松堂書店。

●1603－1607 長崎での楽器製作、豊臣秀頼の引見

【H】Guerreiro, Fernando.（ポ 1550-1617 来日していない), *Relação anual das coisas … 1607*,（Lisboa: 1611; 復刻版 Lisboa: Imprensa Nacional 1942） ポルトガル語。

【H1】上記【H】のスペイン語訳。Figuero, Christoual Suarez de, *Historia y anal relacion de las cosas…607,* Madrid, 1614, Libro Tercero Cap.VII.

【H2】松田毅一監訳 1988『十六・七世紀 イエズス会日本報告集』第 I 期 5 巻、京都、同朋舎。

【H3】Pagés, Léon, *Histoire 1598-1651*（Paris: Charles Douniol 1869)、および、*Annexe,* 6 supl.,（Paris: Charles Douniol. 1870). フランス語。

【H4】吉田小五郎訳 1938 レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』上、東京、岩波書店。（岩波文庫）。

【H5】五野井隆史 1992『徳川初期キリシタン史研究』補訂版、東京、吉川弘文館。（初版：1983）。

●通史

【I】Gay, Jesús López.（1929-), *La Liturgia en la Misión del Japón del Siglo XVI*,（Roma: 1970), cap.III La Música Sagrada. スペイン語

【I1】ガイ・ロペス著、井手勝美訳 1976「キリシタン音楽－日本洋楽史序説」『キリシタン研究第16輯』同朋舎。

【I2】ガイ・ロペス著、井手勝美訳 1978『キリシタン時代の典礼』キリシタン文化研究会、東京。

【K】海老沢有道 1983『洋楽伝来史』日本基督教団出版社、東京。 以上

胡弓に関する史料年表—16～17世紀—

研究情報

（1）日本伝統音楽研究センター主催共同研究の開催概要

A. 2008年度　共同研究「胡弓の源流と受容—東西交渉の視点を中心に—」（研究代表者：竹内有一）
B. 2009年度　共同研究「胡弓の受容と現在」（研究代表者：竹内有一）

（2）日本伝統音楽研究センター主催共同研究にもとづく成果の公開

【データベース】

＊「胡弓に関する史料年表—16～17世紀—」（日本伝統音楽研究センターwebサイト『伝音アーカイブズ』所収。2011年公開。当コンテンツ）

【論文】

＊加納マリ「初期の胡弓について—17世紀の文字資料と図像資料から—」、『日本伝統音楽研究』第8号、2011年（PDF、約1MB）

＊神戸愉樹美「胡弓とrabeca—ソフトとしてのキリシタン起源説—」、『日本伝統音楽研究』第7号、2010年（PDF、約3MB）

【学会発表】

＊加納マリ「初期の胡弓について—17世紀の文字資料と図像資料から—」（東洋音楽学会第61回大会、2010年11月14日）

＊神戸愉樹美「『糸竹初心集』の『らへいか』と胡弓—キリシタン文書の楽器名から読み解く—」（東洋音楽学会第59回大会、2008年11月16日）

＊神戸愉樹美「胡弓とrabeca—ソフトとしてのキリシタン起源説—」（東洋音楽学会東日本支部第45回定例研究会・日本音楽学会関東支部特別例会合同、2009年7月4日）

＊竹内有一「17世紀の胡弓—半球形胴の多様性と新史料—」（東洋音楽学会第60回大会、2009年10月18日）

【公開講座】

＊「胡弓の謎を探る —その源流と魅力—」（日本伝統音楽研究センター、2009年1月12日）

（3）主要参考文献一覧（PDF、約100KB）

最終更新：2012/9/13 公開：2011/12/28

copyrights: Research Centre of Japanese Traditional Music all rights reserved.

2012年 2月 3日　更新

主要参考文献一覧
―共同研究員および近年の著作を中心に―

	人名	年月	タイトル	所収・版元	コメント
1	上野暁子	2007	「近世初期における当道座の実態」	『東洋音楽研究』第72号、47-65頁	17世紀の当道座の状況を知るための基本史料をおさえる。
2	海老沢有道	1983	『洋楽伝来史―キリシタン時代から幕末まで―』	日本基督教団出版局	原典に基づいてキリシタン音楽の概要をまとめた基本的文献。
3	加納マリ	1988	「胡弓」	『世界大百科事典』平凡社	
4	加納マリ	2007	Japanese Kokyu	「環太平洋ガンバ大会inHawaii」での研究発表資料（http://vdgsa.org/PPGG）	胡弓の概説と歴史。英文。
5	加納マリ	2011	「初期の胡弓について―17世紀の文字資料と図像資料から―」	『日本伝統音楽研究』第８号、45-65頁	日本伝統音楽研究センター共同研究における成果の一つ。
6	神戸愉樹美	1998	「キリシタン史料における擦弦楽器」	皆川達夫先生古希記念論文集編集委員会編『音楽の宇宙』音楽之友社、239-254頁	キリシタン文書における擦弦楽器名を解明。
7	神戸愉樹美	2010	「胡弓とrabeca―ソフトとしてのキリシタン起源説―」	『日本伝統音楽研究』第７号、37-59頁	日本伝統音楽研究センター共同研究における成果の一つ。
8	蒲生郷昭	2011	『初期三味線の研究』	出版芸術社	初期三味線に関する基本的史料を網羅した研究書。胡弓にもしばしば言及。1986年以降執筆の論文等をまとめた論集。
9	吉川英史・平野健次・久保田敏子	1989	「胡弓楽」	『日本音楽大事典』平凡社、499-500頁	
10	国立音楽大学音楽研究所楽器資料館	1983	『楽器資料集Ⅲ　弓奏弦楽器』		
11	久保田敏子協力	1993	『胡弓教本』	白水社	第一章「胡弓の知識」に、[平野　1976]の要点と図版を手短に再構成。
12	小島美子	2004	「三味線と胡弓の起源と伝播のルートについて」	『民俗音楽研究』第29号、21-34頁	中近東からアジア・沖縄まで、広い範囲の弓奏楽器を比較する視点。「ヨーロッパ人たちが中世末に持ち込んだのが、キリシタン弾圧を避けるために三味線型に改造したとする説」は誤りとし(30頁)、「西アジアのラバーブが南廻りのルートで、日本の胡弓に至った」(31頁)と考察。
13	田辺尚雄	1964	（胡弓の解説）	『日本の楽器』創思社出版、126-133頁	中国・アジアの楽器との関係について楽器学的視点を取り入れたものとしては最初期のものか。田辺の著作の中では最も整理されている。
14	田辺尚雄・藤田俊一・平野健次	1989	「胡弓」	『日本音楽大事典』平凡社、313-314頁	
15	千葉優子	2011	「胡弓再考―近世邦楽史料に関する一考察」	『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第11号、43-69頁	
16	徳丸吉彦	1978	「胡弓の諸問題」	『創立五十周年記念論文集』国立音楽大学、311-327頁	世界の弓奏楽器の特徴をまとめた一覧表あり。奏法・形状・史料の諸観点から学術的に概説。
17	野川美穂子	2008	「胡弓楽」	小島美子監修『日本の伝統芸能講座　音楽』淡交社、369-381頁	
18	平野健次監修	1976	『胡弓―日本の擦弦楽器―』（ＬＰレコード、論集）	日本フォノグラム	胡弓に関する基本的な学術書の一つ。各論も充実。平野「監修の意図と内容の構成」「胡弓のいろいろ：序説」、徳丸吉彦「胡弓の源流をたずねて：序説」。
19	皆川達夫	2004	『洋楽渡来考―キリシタン音楽の栄光と挫折―』	日本キリスト教団出版局	「はじめに」(13-28頁)に、16世紀後期キリシタン音楽の概説。
20	ホアン・ルイス・デ・メディナ	2001	「キリシタン布教における琵琶法師の役割について」	『東京大学史料編纂所研究紀要』第11号（再録：メディナ　2003『イエズス会士とキリシタン布教』、岩田書院）	キリシタン文書に記された盲人琵琶法師への着目。
21	山路興造	2007	三曲万歳の周辺―「胡弓」の歴史に及ぶ―	『万歳　まことにめでとうそうらいける』大阪人権博物館、90-95頁	
22	結城了悟	2005	『ロレンソ了斎』	長崎文献社	キリシタン布教に関わった盲人琵琶法師の研究。
23	横田庄一郎	2008	『おわらの恋風　胡弓の謎を追って』	朔北社	